

科 目		学 部	学 科	専攻・専修・コース	
文学・芸術とメディアの関わりに関する問題		文芸学部	文芸学科	文芸メディア専修	
受験番号	氏 名			採 点	

設問Ⅰ．以下の文章を読み、続く問１．および問２．に答えなさい。

これまでの技術史研究やメディア研究では、何らかの技術が文化的習慣や社会的制度の変化を決定していると考え、
「技術決定論」とよんできた。技術決定論とは、古典的には、次の二つの考え方で構成される視座である。まず、技術は、人
間の文化的習慣や社会的制度からは独立した、科学的発見から生まれるという考え方である。例えばスマートフォンは、金属
やプラスチックの加工技術、無線通信、液晶画面、シリコンチップ、タッチスクリーン、ソフトウェアといった様々な発明に
よって生み出された。もう一つは、技術は文化的習慣や社会的制度を変化させているという考え方である。例えば、スマート
フォンが普及して以来、新聞や本を読む人が減ったと言われたら、客観的な根拠がなくても、そうかもしれないと思っ
てしまわないだろうか。

この技術決定論という言葉は、多くの場合、批判の意味を込めて使われてきた。まず、一つ目の論点に対してよくある反論
が、技術の誕生にはさまざまな文化的習慣や社会的制度が関わっている、というものである。上述の例に合わせて言えば、ス
マートフォンの形態や機能は、ポケットに入れやすいか、また、外出先でどんな情報が必要になるかといった、私たちの様々
な生活習慣を踏まえて作られている。二つ目の論点については、文化的習慣や社会的制度はそう簡単には変わらないという反
論がよくある。例えば上の意見に対して、「スマートフォンを使っている人の中にはネットニュースや電子書籍を読んでいる
人もいる。一見変化したように見えるが、新聞や本を読むという習慣は残っている」と反論することができるだろう。つまり
技術決定論的な議論の進め方は、技術の歴史を単純化しすぎているという批判にさらされてきたのである。

ではこのような批判を踏まえると、これから何らかの技術やメディアの研究をする人は何に注意すればよいのだろうか。技
術決定論として批判されている議論は捨てればよいのだろうか。そのような議論の中にも、まだ拾いあげて良い可能性が潜ん
でいるのではないだろうか。（中略）

そもそも技術決定論と呼ばれる議論は歴史研究や社会理論研究といった広い領域に展開してきた。その中でもメディア研究
における技術決定論の代名詞となっているのが、カナダの思想家（ X ）の議論だった。それまでのコミュニケーション研
究が人と人の間で交わされるメッセージの内容に注目してきたのに対して、（ X ）は、「メディアはメッセージである」と
いう有名な言葉からも分かるように、メッセージを媒介するメディアに注目する必要性を訴えた。

出典：梅田拓也・近藤和都・新倉貴仁 編著『技術と文化のメディア論 [シリーズ] メディアの未来 ⑭』ナカニシヤ出版 2021年 pp.2-3

- 問１．空欄（ X ）に入る適切な人物名をカタカナ 6 字から12字で答えなさい。
- 問２．文中の「技術決定論」の二つの論点に依拠しつつ、現代社会におけるメディア環境について具体例を挙げて考察しなさい。
（300字以上500字以内）

設問Ⅱ．あなたにとって最も気になるメディア現象を一つ取りあげ、その現象は文学・芸術にとってどのような意味を持つと
考えられるか、自由に考察し記述しなさい。（300字以上500字以内）

No. 2

設問 I

問 1.

問 2.

[illegible]

◀300字

▲500字

 (30×17)

設問Ⅱ

[illegible]

300字

▲500字

 (30×17)